

花王教員フェローシップ「ベトナムのチョウ」体験報告書

■ 報告者：内藤ちひろ（神奈川県秦野市立渋沢小学校教諭）

□ 調査日：2004年8月16～24日

タム・ダオ国立公園は、現在ではハノイに住んでいる人のためのちょっとした避暑地であり、娯楽施設であった。建物のほとんどは観光客用のホテルであり、週末にはツアーを組んでたくさんの人が訪れるため、ディスコやカラオケがあり、レストランやおみやげ物屋が軒を連ねている。もともとはフランス人のためのビレッジであったようで、ところどころにかつてのエントランスらしき骨組みや階段などがそのままの形で残っていたり、今では畑になっているところにタイルの床らしき部分があったりした。



主任研究者のリーンさんは、そのタム・ダオの地でチョウの種類と数を決められたトランセクトに沿って1年に6回調査している。チョウを調べることで、その地域の環境や生態系をとらえているのだ。私たちのチームは今年の第4期にあたり、2002年から始めたこの調査のうちで、一番多い6人のボランティアが集まって調査を手伝った。調査の方法は単純だ。トランセクトは4つあり、その中の1つは普通の車やバイクも通る道2kmほどの部分である。後の3つは熱帯雨林の中で、そ

れぞれ道と草の部分、低木やまばらな竹林の部分、竹や木の生い茂った部分と植物の様子で分けられている。そのトランセクトを歩いて、そこにいるチョウをつかまえて種類を確認し、写真を撮るとまた離すというやり方で、何種類のチョウが何匹その場にいるかを記入していくのだ。何日かやっていくうちに、メジャーな種類はつかまえなくても飛んでいる様子だけで識別できるようになり、効率よく調べていけるようになった。



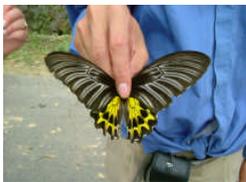
私はこの調査に参加して、まずチョウの種類を改めて知ることができた。今まで見過ごしていたような小さなチョウも見逃さずにしっかりカウントしていくので、環境を知るにはたとえ小さなチョウでも大きな手がかりになるということも実感できた。また、虫取り網の上手な使い方を教えてもらった。私の勤務する学校の近くには生き物とふれあえる自然があり、よく子どもたちと虫取り網を持って出かけるので、これは帰ったらぜひ子どもたちに伝授しようと思った。さらに、ベトナム人たちの環境への意識というものがとてもよく分かった。タム・ダオは今も開発が続いている。ロードトランセクトを歩いていると、背後から大きなダンプカーが何回も行ったり来たりする。見晴らしのいい場所からは建設中のホテルや、これからホテルを建設するらしい場所の山を削る様子がよく見えるし、その削った土を捨てている谷もすぐ近くにある。森のトランセクトに行くと無秩序に竹を切った後が何カ所も見られる。その竹で作った笛やおもちゃを売っている人もた





くさん見かけた。また草むらのあちこちにごみが捨ててあるのも目についた。つまり、開発への意識や生活水準の向上に関する意識はとても高いが、今の開発を続けることが環境にどのような影響を及ぼすかということはあまり考えていないのである。考えていないというよりは、そういった知識を得る場所がないのかもしれない。日本もかつて高度経済成長の時はきっと

同じような光景だったのではないかと思う。いかに生活水準を上げるかということしか考えずに開発していったのだろう。その結果あちこちで公害が発生し、環境が破壊された。最近になってやっと環境保全や環境との共生が大きく取り上げられている。主任研究者のリーンさんがこの研究をどのように生かしていきたいのかという今後の方向性については、ボランティアに参加している限りでは分からなかった。調査中に週末に向けて道の横の草を伐採する人に会っても、その様子を写真に撮ったり、「チョウがまた少なくなる」といったことを口にしたりするのだが、だから環境保全を呼びかけようというのではないし、数の少ないチョウを保護しようというのでもない。しかし誰かが環境との共生を呼びかけていかなければ、確実にチョウの数は減り、ベトナムの自然は破壊されるだろう。



環境教育は日本では最近総合的な学習として取り上げられていることが多い。私は今回の体験を通して、身近な自然を生き物の生態からみていく方法や、調査の仕方などを伝えることと同時に、何のための環境教育なのか、周囲の自然を調べ、そこの生き物を調査し、あるいは自然の中で実際に生活してみるといったことをする意義について、子どもたち一人ひとりが納得できるような形で進めていく

ことの必要性を感じた。

またアースウォッチは自然体験の場であると同時に、様々な土地、文化、人との出会いも提供してくれる場であると思う。今回の体験は、環境教育に役立てていくことはもちろんであるが、それだけにとらわれず、人とのコミュニケーションの場や異文化交流など、教科や内容の枠を越えて様々な場面で生かしていくことのできる重要な資質になったと自負している。

